

演題名

乳児を抱くことによる母親の重心動揺の変化

黒石純子・斉藤哲

ピジョン株式会社 中央研究所

抄録本文

【目的】

乳児を抱くことが母親の姿勢安定性に及ぼす影響を検討することを目的とし、抱っこ時の重心動揺を調べた。抱きの有無、子守帯使用の有無、及び人形を抱いた場合との比較を行った。

【方法】

対象 [調査 1: 母子調査] 母子 12 組 (乳児月齢平均 2.7 ± 1.4 ヶ月、体重平均 5721.4 ± 879.2 g、母親年齢平均 32.6 ± 4.1 才)。[調査 2: 人形調査] 成人女性 13 名 (年齢平均 32.2 ± 4.0 才)。実習用乳児人形 (布製、身長 76cm、体重 5000g、関節可動)。手続きマットスキャン (ニッタ製) により、開眼 30 秒での重心動揺を 5 条件 (抱き無、素手抱き縦・横、子守帯抱き縦・横) で計測し、軌跡長・面積分析を行った。乳児は落ち着いた状態で計測した。倫理的配慮として、事前に調査内容を文書及び口頭で説明し同意を得た。

【結果】

抱き無しでは調査間に有意な差はなかった。調査 1 では、抱き無しと比べ、素手抱き縦・横で単位面積軌跡長が減少し ($p < .05$)、外周面積及び矩形面積が増加した (いずれも $p < .05$)。子守帯抱き縦・横は、抱き無しと素手抱きの中間的値を示した。調査 2 では条件間の有意差は認められなかった。【考察】 乳児を抱くことにより、微細な姿勢制御が減少し動揺面積が広がること、子守帯使用によりその変化が軽減されることが示唆された。また人形を用いた場合はこの変化が認められなかったことから、一定重量の物を上体に抱えた場合とはまた異なる、抱っこ時特有の重心動揺があると考えられた。